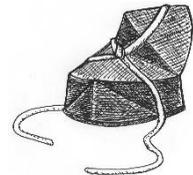


土屋宗遠・義清親子、足柄峠で出会う

— 平安時代後期 —



「伊豆に流されていた源頼朝さまが、兵を挙げたそうです」
みなものよりとも

京都にいる土屋義清のもとに、郎党ろうどう（家来）が外から戻ってきて、聞き込んできたことを話しました。

「それで父たちは、どうした」

「土屋宗遠さま、岡崎義実さま、真田義忠さま、みな頼朝さま方についたようです」
むねとお
おかぎよしぎね
さなだよしただ

土屋義清は、岡崎義実の次男。兄が真田義忠で、母は土屋宗遠の妹です。宗遠に子がなかったので、義清が宗遠の養子になりました。

治承四年（一一八〇）、源頼朝は平氏打倒のため立ち上がりました。東国の武将たちは、かつての主^{あるじ}だった源氏に味方する者、今の権力者である平氏に味方する者に分かれしました。

「すぐに、父上たちの元に参るぞ」

「頼朝さまのもとで、平氏と戦うのですか」

「今はこうして平氏に仕えているが、源氏には長年の恩がある。まして、父たちがいるのなら、そうするのが当然であろう」

取るものも取り敢^あえず、二人の郎党と共に京を立ち、東国へ向かいました。

そのころ、源頼朝の軍は、石橋山^{いしばしやま}（現小田原市）で大庭景親^{おおばかげちか}率いる平氏方の軍に大敗

し、箱根山中をさまよっていました。

「戦いは時の運、私はいったん安房（現千葉県）に逃れ、再び平氏を倒すための兵を集めようと思う」

頼朝は、付き従うわずかな武将たちに言いました。さらに、土屋宗遠に命じます。

「そなたには、大事な仕事がある。甲斐（現山梨県）へ行き、その源氏一族の者たちに、この頼朝に協力するよう伝えてくるのだ」

「はっ、お役目、確かに承りました」

宗遠は、頼朝たち一行と別れ、甲斐へ向かいました。

甲斐へは、箱根山中を抜け、足柄峠を越えていかなければなりません。足柄峠には関所があり、頼朝挙兵のあと、ここを通行する人の取り調べが厳しくなっていました。

もちろん宗遠は、ここを通るわけにはいきません。道から外れた森の中を進むしかあり

ませんでした。

宗遠は、夜を待って、その森へと分け入っていきました。すると、反対の方角から誰かがやってくる気配けはいがします。

こんな夜更よふけに、関所のあるきちんとした道を通らず、このような森の中をうろついているのは、何者だろう。

「盗賊とうぞくか。いや、もしかしたら源氏に味方する者かもしれない」

そう思った宗遠は、刀の柄つかに手をかけて慎重に近づきます。そんな宗遠に気付いた相手も、刀に手をかけ身構えました。

「誰だ。なぜ、わぎわぎ道のないこんなところを通る」

宗遠がたずねます。

「そういうあなたこそ何者だ」



「その声はもしや、義清ではないか」

「まさか、父上ですか。義清です」

二人は、このめぐり会いに驚き、肩をたたきあって、互いの無事を喜びました。

「私も、頼朝さまのお役に立ちたいと思い、京を出てきました。ですが、途中で源氏が敗れたと聞き、馬と付き従った者を返し、私一人、ここまでやってきたのです」

「確かに、石橋山の戦いでは負けてしまった。残念なことにそなたの兄の義忠どのは討ち死、味方も散りぢりになってしまった

が、頼朝さまや岡崎どのは無事だ。再び兵を挙げるために甲斐へ向かっている。私もそのあとを追っているところだ」

このとき宗遠は、うそをつきました。養子である義清のことが信じられないではありません。ただ、どこからどう話が伝わるかわからないので、今、頼朝を危険にさらす情報を言うわけにはいかないのです。

「そなたも共に参ろう」

二人は連れ立って甲斐へと向かいました。

数日後、めざす甲斐源氏の館やかたにつくと、宗遠は、義清に本当のことを打ち明けます。

「さぞお辛うらかったですでしょう。恨みになど思いません。むしろ父上を誇りに思います」

そう言って義清が、宗遠の手を強く握ると、二人の目からはあつい涙が流れ落ちました。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸